

## 岡山実験動物研究会の近況

会長 猪 貴 義

岡山実験動物研究会が誕生して以来、3年目を迎え、ここに研究会報第3号を刊行することになりました。

本研究会は大学や学部、研究機関のわくを越えて、実験動物の側にある研究者と動物実験の側にある研究者とが集まり、実験動物と動物実験についての知識と情報の交流をはかり、これら領域の進展に寄与することを目的として発足したものです。幸い、役員ならびに会員の方々の積極的なご協力とご支援をいただき、会は一歩、一歩と着実に発展の方向へと進んでまいりました。現在までに、研究会の開催は第6回を数え、研究会報の発行は第3号、会員数は約80名に達しました。若い会員が次第に会に参加し、発言の機会が多くなってきました。望ましい傾向であります。今後とも会組織の充実をはかるとともに、一層の発展をはかってゆきたいと念願しております。

21世紀にむけて、新しい総合科学技術としてライフサイエンスやバイオテクノロジーがとりあげられ、その構想が検討されてきています。ライフサイエンスの推進にあたり、各研究分野に共通する課題として、実験動物の開発・改良、良質の実験動物の生産・供給がとりあげられ、さらに、この分野で活躍する専門技術者ならびに研究者の養成が急務とみられています。また、他方、動物実験にたづさわる研究者自身も、実験動物や動物実験法に関する多くの情報や知識なしではすぐれた研究成果をあげることが困難な状況となってまいりました。

今後、ライフサイエンス、バイオテクノロジー、さらに、境界領域研究の推進と関連して、本研究会の果す役割は一層重要となってくるとみられます。それぞれの機関、または、個人のかかえている問題を相互に出し合い、問題の本質について、十分に時間をかけて討議し、問題の解決にあたる

必要があると考えます。

昨年12月8日、矢部芳郎教授（医学部）のもとで開催された第6回岡山実験動物研究会においては、小川勝士教授（医学部病理学）の特別講演「動物実験と私」に加えて、新たに、懇談会として、「実験動物の飼育管理実験手技等の問題点」がとりあげられました。岡山大学の医・薬・農学部、川崎医科大学、重井医学研究所、林原生物化学研究所の各演者から具体的な問題が提出され、時間の経過を忘れて、熱心な討議が行なわれました。ここに、新しく、懇談会形式による話題提供という、肩のこらない、話し合い方式が生まれました。このような話し合い方式を今後とも、大切に、活用したいと存じます。

なお、来る4月27日(土)には、田坂賢二教授（薬学部）のもとで、第7回岡山実験動物研究会の開催が予定されております。いづれ、会の詳細についてはご案内いたしますが、多数の方々のご参加を期待いたしております。

昨年12月に、開催された当研究会の役員会ならびに総会において、前役員全員の留任が決定されました。引続きあと2年全役員が力を合わせて会の運営にあたることになりました。なお、理事1名の欠員補充については、心理学の三谷恵一教授（文学部）が推薦され、決定されました。三谷教授は実験動物を用いた行動・心理学の研究においてもご造詣の深い方であり、今後の活躍が期待されます。

本研究会は専門領域を異にする方々の集まりではありますが、会員の方々には本会設立の意義について深いご理解をいただき、ご支援をたまわってまいりました。本研究会が岡山において特色のある研究会として成長し、着実に発展することを願ってやみません。関係各位には引続きご鞭撻とお力添えをたまわりますよう重ねてお願いする次第です。